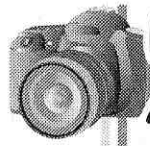


はんしん2020s



写真・文 山田哲也

37

「阪神甲子園球場」（西宮市甲子園町）は1924（大正13）年に開場し、「野球の聖地」として幾多のドラマが生まれ、球史を刻んできた。しかし、完成から80年以上が過ぎて老朽化が進み、来シーズン終了後、リニューアル工事が始まる。

野スタンド間が伐採される。1937（昭和12）年から球場の南側に住む太田康子さん（78）は、ツタの伐採を感慨深く見つめる。太田さんは、45（昭和20）年8月

阪神甲子園球場

工事はスタンドの耐震補強に加え、銀傘も架け替えられて新しくなる。スイート席やフィールドボックス席も新設され、09年3月に完了する予定だ。

この工事に先立ち、球場の名物の一つ、外壁を覆うツタの伐採が進められている。作業は一塁側アルプス

5日、西宮大空襲の夜に三塁側内野スタンド（現在の検品所付近）に避難した。いつも閉まっている門が開いたので逃げ込むことができた。「阪神パークの象象も避難してきていたのよ」と当時の思い出を話してくれた。

戦前、一塁側アルプススタンド下には、室内運動場、三塁側には25坪の温水プールがあった。夏は外野とアルプススタンドの間にスクリーンを張って映画会が開かれ、芝生ではラジオ体操も行われたという。

工事終了後、ツタは再び植えられることになっている。現在のようにスタンドの外壁一面がツタで覆われるまで10年ぐらいかかるという。



「聖地」のツタしばしの別れ



開場当初から球場の外壁を覆ってきたツタが伐採され、コンクリートが現れた一塁側アルプススタンド